

第3回

地球人手当て！？

——飢えと暴力をなくす特効薬——

岡野内 正

法政大学多摩キャンパス 2号館<大教室A棟>

2010年6月19日(土) 13:30~15:00

1. ベーシック・インカムという考え方

どうも、岡野内です。よろしくお願ひします。

動画を見た方は髪が長い人が現れると思ったかと思うのですが、あまりの暑さに切ってしまいました。即身成仏というんですか、そういうわけでもないですが(笑)。今、映像が出ていますが、あとで少し時間を取りながら見ていきたいと思ひます。それではさっそく入ります。

タイトルに、地球人手当てという訳をつけてみました。飢えと暴力をなくす特効薬というのですが、こういう話は世界でもそれほど議論されていないので、今日皆さんにお話しできるのをとてもうれしく思っています。というのは、今日お話を聞かれた皆さんが、ぜひ、こういうやり方もあるのだということをいろいろ議論し

ていただいて、そこから何か世界を変える流れができていけばいいなと思っています。

実は、この考え方はベーシック・インカムというものです。基本所得。ベーシックは基本的ということで、インカムは所得、入ってくるお金です。いろいろな人がいろいろなことを言っているのですが、私は生活基本金あるいは市民生活手当というような訳がいいと思ひます。私の場合は、グローバル・ベーシック・インカムで、全世界でやろうという話です。学生諸君のところでは講義をして、感想文を読んでいると、社会主義とどう違うんだというような議論がかなり出ていましたので、最初にそのへんを少し。

まず、社会主義、あるいは近代以前の封建社会あるいは奴隷社会も一緒だと思ひているの

ですが、「決められたことをやってね、めしは食わせてあげるから」。これが基本的な考え方だと思います。ところが資本主義社会、自由主義と言ってもいいですが、「好きなことをやってもいい」と。だけど、「ちゃんとめしが食べる仕事というのは本当に限られているから、飢えないようにしてね」。学生諸君が3年の夏頃から就活をしていますが、不景気なので明らかに全員が就職できるだけの仕事はない。飢えないように好きなことをやりたいのだけれど、ホームレスにならずになんとかやっていくにはどうしたらいいのか。しかし、そんなことはしったことではない。これが2番目の資本主義の考え方です。

3番目のベーシック・インカムへの考え方はそれと違って、めしは食わせる」。無条件ですべての人に基本的な衣食住を保障するから、「いろいろ試して本当に素敵なことを探してください」という発想です。実は、世界の歴史をいろいろ見てみますと、結局資本主義が行き過ぎると食べられない人が増えて、革命が起こって、皆で働いて食おうとなる。ところがそうすると、必ず独裁者が出てきます。お前はこれをしろ、などというのが嫌で、再び革命が起こって自由主義になる。1と2の繰り返しと書いておきましたが、そういう歴史がずっと繰り返されてきている気がしています。

だけど、そろそろそういう循環はやめて、何か新しい方向に行けるのではないか。いろいろ

なデータを見ているうちに、今の世の中はそんなに貧しいのだろうか、全世界の人を食べさせるくらいはできるのではないかと直感的に思って調べると、結構そう言っている人が出てくる。今からお話しする議論です。後半部分でその話をします。

2. 北と南、それぞれの世界の貧しさ

しかし、最初に世界の飢えと暴力という、そのへんのイメージを少し持っておいたほうがいいだろうということで、映像を見ましょう。これは、広河さんという中東のことをやっている人が責任編集で出している『DAYS JAPAN』という雑誌の、フォトジャーナリズム大賞関係のものから失敬してきました。

[スライド] これは、よく見ますとケニアの女性が水汲みをしています。私も南北問題のゼミですから、ゼミの学生と毎年9月と2月に世界各地の現場を見に行きます。ミンダナオ島というフィリピンの一番南の島、電気もガスも水道もなく日本人の方が住み込んで環境教育をやっているところに、10人くらいの学生と行きました。そのとき、ちょうどこんな感じ、あるいはもっと小さい泉がありまして、そこに当番を組んで水汲みに行くんです。ケニアの方たちは今ちょうど干ばつになっていまして、それでたくさん集まっている。たとえば、この方などはやっと水が汲めてニコッとしていらっしゃいますが、こちらの方はギロリとこちらを見つめていて、上から目線でなに写真を撮って

いるんだというのを感じると思います。ミンダナオの話ですが、昼は村人たちが汲みにくるので、外国人が来てたくさん汲むと村人が困るため、夜中に起きて深夜の2時ごろローテーションを組んで水汲みに行きました。そんなことを思い出しながらこれを見ていました。

[スライド] 次のこれは、アフガニスタンの少女です。ヘリコプターの爆撃を受けて、やけどをして病院に収容されて薬をたくさん塗ってもらったところだそうです。これを見てみると、思わず涙が出てくる感じですか。子どもの表情が非常に痛々しいといえますか。

[スライド] 次にいまして、これはパキスタンの採石場です。川のほとりから石を取ってくるというような仕事です。機械でやればあっという間にできてしまうのですが、人でやったほうが安いので、人でやっている。

[スライド] ごめんなさい、バングラデシュですね。今の写真の左半分は取り込むのを失敗して半分ずつになってしまいましたが、この奥のほうで男の人たちが何か取っているのが見えると思います。バングラデシュは本当に石がないところで、デルタ地帯なものですから、こういうことをずっとやらせているわけです。バングラデシュもゼミで3回くらい行きました。

[スライド] これはガザです。2009年、去年の1月です。イスラエル軍の空爆が、花火のように見えます。その巨大爆弾が落ちるとこうになってしまうというものです。私もガザには日本のNGOのスタディツアーで1999年くらい

に行ったことがあります。こういうのを見ると、そのときの人はどうしているかな、と。

[スライド] これは子どもの写真で痛々しいので次に行きます。

[スライド] 前の前の写真で見せた花火のようなものは、白リン弾というものです。これが体に付くと、バーッと皮膚を食い破って燃え続けるそうなので、すごく緊迫した感じが出ていると思います。

[スライド] もう一つ、空爆でやられた人の、泣き叫んでいる家族の方でしょうか。

[スライド] 次のこれはいわゆる典型的な飢餓のものです。コンゴの女性ですが、難民で逃げてきて結核と同時に栄養失調になっている。

[スライド] コンゴが今一番ひどいことになっていまして、これはコンゴの難民キャンプです。ルワンダの内戦以来逃げ込んできた、武器を持って入り込んできた人たちが反政府軍になって、政府軍とずっと戦っている。

[スライド] これは逃げて行く人たちです。家財道具をたくさん、マットなどを持って逃げています。

[スライド] これは戦車です。政府軍が、反政府軍が占領した村をずっと攻撃している。

[スライド] その難民キャンプの子どもが袋をかぶって遊んでいる映像です。

[スライド] 今度はアフガニスタンで、オートバイに乗っていたところを爆弾、地雷ですか、落ちて爆発するもので足を吹き飛ばされた人

が、義足の訓練をしています。

[スライド] 同じくアフガニスタンで、運転手さんがアメリカ軍に止まれと言われて、なにか話しかけられたけれど英語がわからないので、そのまま行こうとしたら撃たれてしまって下半身麻痺になった。彼の痩せ方というのが、あとでお話しする栄養失調。そういう感じだと思います。

[スライド] これがパキスタンです。パキスタンの、アフガニスタンと接しているあたりに部族支配地というのがありますが、そこから逃げてきた。今はタリバンという反政府勢力がそこから攻撃してくるといっているので、アメリカがずっとそこに無人飛行機などで攻撃を仕かけているところです。パキスタン政府も一緒になってそこを攻撃していて、逃げてきた人たちの難民キャンプの姿です。

[スライド] これがイスラマバードです。人々がお祈りしていますが、よく見ると真ん中にある車が、攻撃された跡でハチの巣になっています。

[スライド] 次はベトナムの枯葉剤。1970年代にアメリカ軍が地上に撒いた枯葉剤で未だに、この女性の方は35歳だそうですが重い後遺症を背負っています。

[スライド] もう一つ、ベトナムのこの女性は、19歳ですからベトナム戦争が終わってから生まれた方だと思います。枯葉剤はずっと地中に残りますから。結局、今あちこちでやっている戦争も、必ずいろいろなものが残ってしま

うんです。それがずっと子どもの代まで伝えられていくといいますか、土壌自身が汚染されてしまう。

[スライド] 最初に見せましたこれは、アフガニスタン難民の女性の方がブルカというのを全部かぶっていて、これは子どもがかわいいので、何というか……。

ということで、ややそのへんのイメージを持ちながら、まず、世界の貧しさについて話します。

(1) 飢える 10 億人

FAO という国連の食糧農業機関がありまして、そこが一番たくさんデータを持っています。各国の食料供給量は、つくっている生産量と貿易で出たり入ったりする輸出入量を足し引きしている。所得の格差、貧乏な人と裕福な人の違いを考慮する。さらに食料の値段。そこから階層別に、大体このへんの人はこのくらいの食料を得て、このくらいのカロリーをとっているという計算をします。地域や年齢、性別で違ってくるかなり詳しい基準がありまして、それに沿って FAO がレポートを毎年出しています。

それで見た図が、第1図(1)です。英語のままです。英語のままです。これが世界の慢性的飢餓人口。要するに、必要なカロリーに満たない消費カロリーしかとれていない人たち。この図は絶対数です。最初の1969-71年あたりのデータで9億足らず。それがだんだん絶対数で微妙に減ってきて、ところが1995年あたりでガー

ッと上がって、2008年から2009年にかけて、ついに10億を突破してしまうという、非常に恐ろしいグラフです。

(第1図(1)挿入)

これは私もあまり知らなくて、ある日チラッとニュースで見ました。減っていたところはフォローしていたのですが、急に増えたのはよく知らなかった。ネットで調べてみたら、ちょうど増えたときにFAOの事務局長さんが、1日だけですがジュネーブにあるオフィスで1日食べないというハンガーストライキをやっています。ところが、ほとんど報道されていない。このレポートを読んでいて、事務局長さんに沸々とした怒りがわいてくるというのはよくわかります。

第1図(2)はパーセンテージです。世界人口は基本的にずっと増えていまして、最近やや横ばいになりつつありますが、それでも基本的にまだ増えています。したがって、絶対数が増えてもパーセンテージで見ると、ご覧のように1969-71年からずっと、2004-06年まで減っている。ところがこのへんから逆転しまして、2008年、2009年でパーセンテージもグッと上がって、ほぼ20パーセントに近づいています。ということは、全世界で5人に1人が、必要なカロリーをとれていないことになってしまうわけです。

(第1図(2)挿入)

国連の事務総長やいくつかの機関が言っていることで、いろいろな計算があるのですが、餓死、飢えて死ぬ人というのが国連あたりでは年間1800万人。これを割ると1秒に1人死にます。そのうち子どもが5秒に1人。5分の1くらいが子どもだろうという推計があります。そうすると、たとえば今日この講義90分で、一体何人死ぬのか。ある種よくある話ですが、改めて先ほどのイメージを持ちながら少し考えていただくと、すごくひどい話だと思うわけです。

しかし、第2図をみてください。一体どこの人が飢えているのかという話です。左側の一番たくさんあるのが、アジア太平洋です。

(第2図挿入)

アジア太平洋地域とは何かというと、これは少し古いデータで、2004年から2006年のデータですが、インドでは2億5000万人が飢えています。中国は1億3000万人です。バングラデシュ、パキスタン、インドネシアがそれぞれ4000万人。先ほどの難民キャンプがあったコンゴは4000万人、エチオピアが3000万人というのが上位8カ国になっています。

本当にひどい話ですが、インドは核兵器を持

っています。中国もそうですよね。お金持ちがたくさん増えて、あとでお金持ちのデータも見せませんが、どちらもすごいお金持ちがいます。そういうところで2億5000万人飢えていて、中国もそうです。学生言葉では、ありえない(笑)。そういうことになっています。

(2) 飢え、貧困の連鎖

ところが、この図(第2図)を見ますと一番上の Developed countries というのは先進国です。先進国も、若干1500万人ですが、カロリーが足りない人がいる。それが、増加率で見ますとかなり増えています。2008年から見ると一番増えているんです。これは、全世界不況のなかで失業者が増えたということです。どう計算してみても、きちんと食べていない人たちが先進国でもかなり増えている。

そこでいろいろとデータを調べますと、日本でも毎年ほぼ50人が餓死している。医師が餓死だと診断した人を厚生労働者がデータで出すもので、毎年40数名から80数名とかなり変動はありますが、そのくらい餓死が報告されています。どういう方かというと、中高年の男性一人暮らしの方で、仕事を失って、生活保護を受けに1度2度は行くのだけれどどうも大変だということがわかって、そのまま寝ているうちに餓死してしまった。どうもそういうような姿が浮かび上がってきます。

FAOですが、どうしてこんなに飢えている

人が増えたかということ、要するに失業者だと言います。食料はあるけれど仕事を失った人が飢えている。その直接の被害者は、都市の貧困層。都市で仕事を失って飢えた人たちが、町で飢えているから、特に第三世界がそうですが、郷里に戻るんです。しかし農村に戻っても、もともと農村の土地がなくて食えないから出てきた人たちですから、戻ってこられても困るわけです。それで、農村で皆飢えているということになってしまっているわけです。そのへんがいろいろ書いてありますので、あとでまた見ていただければと思います。

また、大人が飢えてくると子どもと一緒に飢えるのですが、飢えるだけではなくて、学校に行かずに働く。つまり、児童労働をする人たちが増えてきます。それがこの第1表で、2008年の数値が最近発表されました。オリンピックのような感じですが4年ごとに発表されるんです。

(第1表挿入)

2004年の数値を出したときのILO(国際労働機関)を見てみますと、within reach と書いてあります。もうすぐ児童労働をなくせる。ところが2008年を見てみますと、ほとんど減っていない。300万人減っているだけです。これは、先ほど言いました世界経済危機のせいです。大人が仕事を失っているときに子どもが学校

に行っていられるかという、なかなかそうはいかないわけです。

ここに朝来る途中で、バスの中で学生と一緒にになりました。今日は土曜日ですが授業をやっていて、特に教職課程の授業はたくさんあります。その彼女が言うには、自分はスポーツ推薦で法政大学に入って、今3年生でそろそろ就職活動もあるのだけれど、教職一本でいくか、それとも就職するか考えているところだと。ところが、実は里のほうから、お金が苦しいので自分で稼いでくれと言われた。

私は、話をするからおいでよと、ここに誘ったんです。そうしたら、バイトが入っていてダメですよ。なんだかんだ聞いていると、郷里では塗装か何かの自営業をやっている。ところが、仕事をやったのにお金を払わずに逃げたしまったというお得意さんが続出して、お父さんの会社も本当に危ないというか、倒産の瀬戸際にある。不渡りですよ。だから、とにかく自分で授業料を稼いで、生活費も稼いでやってくれと。自分もあと1年半なので、なんとかアルバイトをする。スポーツ推薦で入ってきたけれど、これ以上体育会を続けるわけにもいれないので部も辞めて、アルバイトに専念しながら教職を取りますという話でした。

日本も、法政大学もあまり学費が安いほうではない。だけど、ヨーロッパなどは大学の授業料が基本タダなんです。国連の人権規約にもタダにしろと書いてある。だけど、アメリカと日

本だけはタダにしろというところを外して、条約を批准してやっているものですから、勉強したい人が勉強できない。さらに、奨学金も日本の場合とはとても少なく、昔でいう育英会も利子付きで返すことになっている。そういう話でバスの中で盛り上がっていました。

世界的にいいますと、子どもの場合は15歳未満ですが、先ほどの第1表を見ると、ご覧のような形になっています。これを見ますと、危険で有害な労働だとか無条件に最悪の労働。このへんの人数がかなりいまして、新しいデータがうまく見つからなかったのですが、これもかなりのものになっています。他にもたくさん、いろいろあるのですが、このへんでそろそろ貧しいほうをやめます。ごめんなさい、もう一つありました。一見豊かだけれど実は貧しいというものです。

(3)一見豊かな、貧しさ

今度は肥満の話をしただけさせてください。WHO（世界保健機関）が、体重÷身長²の二乗でBMIという数値を出して、過体重（overweight）と肥満を出しています。それによりますと、なんと2005年のデータでは全世界15歳以上で16億人が過体重。これは日本肥満学会の言い方だと、肥満1度でしたでしょうか。WHOの肥満を肥満2度などと言っていたと思います。16億人が過体重で、そのうち4億人が肥満で、2015年にはそれがもっともっと増

えるだろうという予想が出ているわけです。

国別に見てみますと、アメリカの場合は成人肥満比率が 33.9%です。過体重まで含めると 66.7%。3人に2人がカロリー取り過ぎで、3人に1人は明らかに肥満ということになっています。ちなみに日本は 3.3%で、過体重は 23.2%ですから、カロリーの面ではそれほど取り過ぎの人が多くわけではない。

成人肥満率を見てみますと、太平洋の国が多いです。アメリカ領サモア、ナウルとか。しかし、サウジアラビア、イラク、エジプト、メキシコも多い。甘いものが好きな人たちも、かなりあります。ただ WHO の文書をいろいろ読んでみますと、都市化した中・低所得層で増加していると言っています。それまで農村地帯に住んでいた人は、とにかく動くし運動ができる。食べるものも割と油や砂糖の少ないものを食べていたけれど、それがすごく変わってきて、結局貧困が原因ではないかということを行っています。

この飢餓と肥満というのを見てみると、本当に不思議な気持ちになります。どちらも、自分で自分の食料というか、食生活をコントロールできない。そういうことになっていることに問題があると思います。それは、今の食生活が基本的に買い食いというか、買ってこなくてはやっていけないということで、しかも地産地消という近くでやるのではなく、大きな企業が工場で作ったものを食べざるを得ないという問題。それと、やはり住宅環境です。特にアメリ

カのデータを見てみますと、黒人や、ラテンアメリカから来るヒスパニック系の人たちは、肥満になる確率が白人の3倍や2倍と本当に多いです。それはどうしてかということ、やはり住んでいるところが危なくて運動もできない。ジョギングしていると撃たれるとか、そういうようなことがアメリカ保健省の資料などに出ています。

先進国が本当に豊かかということそうではない。まず第1に、先進国での麻薬問題あるいは神経症、精神病、自殺、過労自殺あるいは過労死。次に挙げるのは、安全保障の罨と私は呼びたいと思っています。何か攻めてくるのではないか、危ない、テロが起こるのではないか、あるいは脅威があると言って基地をつくり、兵隊を訓練し、いろいろやっているうちに兵隊になる人もいろいろな意味でトラウマを抱え、基地の周辺の人もいろいろな意味で被害を受ける。しかも、そういう現象が一つの国だけではなくて、各国でお互いに起こり合っているという状況がすごくあるように思います。

3番目にいきましょう。リスク社会という議論はドイツの人が言いだしたのですが、要するに大量破壊兵器、核兵器、生物兵器、化学兵器、それと対応するいろいろな技術は非常にリスクの高い技術です。原子力発電所もそうですし、遺伝子組み換えもそう。劇薬の化学薬品が環境中に出ると環境ホルモンになってずっと地球

上を回ってしまうというのもそう。結局、地球全体が共通のリスクといますか、敵味方を越えて同じリスクにさらされる。そういう意味では、連帯責任のようなものを妙に負わされてしまっている社会になっているのではないかという議論があります。

最後に、地球環境危機。これは今の問題と非常にからみありますが、地球の生態系全体がほぼ全面的に破壊されるということになっている。そうすると、お金だけ豊かになっても、果たしてこういうことで豊かさといえるのか。そういう問題です。世界の飢餓と、一見豊かだけれど貧しいということを踏まえたうえで、それにも関わらずやはり豊かにはなっているということころを少し見ていきたいと思います。

2.世界の豊かさ

(1)世界の生産能力

まず、食料について、世界の生産量と生産能力を示す第3図(1)を見てみましょう。

(第3図(1)挿入)

これは日本語で出ています。川島さんという東京大学農学部の方がつくりました。非常に手堅い実証をしています。食料危機論に対して、私から見ると徹底的に批判をしています。たとえばこの図を見ますと、1960年に公式統計が取られ出して以降、食料生産は人口の伸びをはるかに上回って伸びています。ですから、穀物は

ある。それが回っていないだけです。貧乏人が買えていない。金持ちや普通の人にはまあまあ買えて、結構残して捨てたりしています。

さらに、つくる気になればつくれるというのが、次の第3図(2)です。

(第3図(2)挿入)

休耕地がなぜ休んでいるかというのと、そこでつくと値段が暴落するからつからない。これは日本もそうです。ヨーロッパもアメリカも、そういう土地がたくさんあります。そういう意味での休耕地。土地を休ませるというのも少しは入っていると思いますが、基本は政策的な休耕地だというのが彼の説明になっていますので、そういうふうに見るといいと思います。さらに一番下、穀物の畑などが見ついている土地は、むしろ1960年代から減っているくらいです。つまり、生産能力も十分ある。むしろ、作り過ぎないように調整しているくらいだという話です。

これは食料だけではなくて、工場もそうです。他の生活必需品についても。工場も全部は稼働していません。発電所などもそうです。全部稼働させると値段が下がってしまうのでそうしている。要するに全世界にはつくる能力、したがって、モノはたくさんあるという話です。たくさんあるというのは実は主観的な話で、本

当の必需品は絶対的に決まってくるのですが、ある程度以上になると一体どのくらい必要か必要ではないかは、結局その人がどう思うかです。そこで、幸せ曲線というのが面白いのでぜひ楽しんでいただきたい。

(2)経済発展≠幸せ

第4図・第5図を見てください。

(第4・5図挿入)

アメリカの社会心理学の人が調査したところ、左側の縦軸が一番上が4.25になっていて、上になればなるほど幸せです。あなたは幸せですか、あるいは自分の生活に満足ですかと聞かれて、そうですと答える人の割合が高いということです。横軸がGDP、一人当たり所得。要するに、経済が発展すればするほど右の方に来ます。この図が結局何を示すかということ、一人当たり所得が1万ドルくらいになるまでは、経済発展して一人当たり所得が高くなればなるほど、幸せだと答える人が増えてくる。

ところが、それ以上になると、ほとんど横ばい。つまり、経済発展はしたけれど、あまり幸せとはいえない。面白いのですが、このへんのラテンアメリカ諸国、これは1995年から1997年で、たとえばコロンビアは少し微妙ですが、エルサルバドル、グアテマラ、ベネズエラ、このへんは80年代にすごく内戦が激しくてたくさん大虐殺があったところですが、最近のデー

タなので、かなり幸せ度は高いのです。

ところが、経済のほうで見ますと、1万ドル以下です。非常に低い。われわれになじみのある国でいきますと、たとえばフィリピンはこのレベルです。つまり、出稼ぎに行きたいと思うくらいの国です。このドル表示は、PPPという購買力平価で示したもので、世界中のそれぞれの国で、大体何が買えるかという、世界共通でものが買える力を表す単位になっていると考えていただければいいと思います。とにかく、ラテンアメリカ諸国の幸せ度は非常に高い。

日本を見ますと、Japanというのがかなり右側のほうにあって、経済発展度は高いのだけれど、幸せ度が非常に低いんです。フィリピンなんかより、もっと日本のほうが不幸せです。ほぼ一緒くらいと言ったほうがいいですかね。そうすると、日本の経済発展は何だという話になります。フィリピンより何倍も経済発展しているのに、人にとの感じる幸せ度が本当に低い。北欧諸国は割と高くなっていますが、それでもラテンアメリカと比べると、大体同じくらい。この図は面白いので、じっくり見ていただければと思います。

第5図はアメリカのデータで時系列ですが、今度はvery happy、本当に楽しい、私はとても幸せだと答えた人の比率が、横ばいになっています。Percentage very happyというのがそれです。それに対して、右肩上がりになっているReal income per headというのが、一人当

たりの実質所得です。それを見ますと、1945年あたりの戦後すぐから始まって、1955年、1956年あたりが一番ピークになっています。50年代のアメリカは、経済はそれほど発展していませんが、戦争も終わってすごく幸せと答える人がほぼ40%近くになっています。ところが、その後だんだん減ってきまして、以後30%前後です。

しかし経済のほうは、アメリカは50年代、60年代通じて高度成長がありまして、一番右の2000年でほぼ3倍になっています。しかし幸せ度はほとんど上がらず、むしろ下がっている。ということは、結局何のための経済発展だったのかという話です。それが非常にはっきり出てきていると思います。この本を書いたLayardという人は、日本やイギリスもほぼ同じだと言っています。その元データをまだ入手していないのですが、大体どこでもそういうことが言えるだろうということです。

(3)余っているカネ

では次です。全世界にモノはある。ではお金はどうかというと、お金も本当に余っています。それを表わしているのが第2表です。

(第2表挿入)

2007年から2008年にかけてグッと減って32兆円です。世界で投資可能資産100万米ドル以上を持つ人の資産額の合計です。100万米

ドルですから日本円にしますと1億円くらい。投資可能資産ですから、一応自分が住んでいる家などを除いて投資できる資産が1億円以上ある人。これは実は日本も100万人くらいいることになっています。たぶん皆さんのなかでも、土地をお持ちの方は住んでいる家以外に、特に都市近郊ですと土地の値段は高いものですから、1億円以上になっている方はかなりいらっしゃると思います。そういう方々のデータを出しているわけです。実は、これは投資コンサルタント会社が出しているデータでして、この人たちに投資させようというマーケティングのためのデータです。

2007年から2008年にかけて、例のリーマンショック、世界経済不況が来て、減ったけれども2004年や2005年水準より少し下がる程度で、たいして減っていない。このレポートを見ますと、すぐまた増えるというわけです。

資産の種類を見ますと、何に投資しているかということと株式や社債などの債券が同じくらいです。株式の場合は配当がなくなったり上がったりしますが、債権の場合ですと利子は一定です。そういうものへの投資が増えたりします。その一番下にあるオルタナティブ投資。これは少し下につけておきましたが、仕組み債やヘッジファンドといった少し怪しいもの。すごく儲かるかもしれないけれど危ない、リスクの高いもの。これが近年減っていますが、それでもかなりある。そういうわけで、このへんのお金が、実はバブルというか投機に回って、今回

の世界危機の原因の一つにもなっている。そのへんのイメージを得ていただければと思います。

最後に、100万ドル以上所有者です。1億円以上持っている人が、アフリカでもかなりいます。これは100万人単位ですから、10万人オーダーでいるというわけです。先ほど見せた映像のようなところの裏で、すごくお金持ちのアフリカ人もいっぱいいる。増えてきているという話です。もちろん、ラテンアメリカなども含めてです。

そういう意味で、ものの豊かさ、金の豊かさ、それだけではなくて、実はヒトがヒトを大事にする仕組みも、21世紀くらいになって急に進んでいるのではないかというのが次のところ

(4)他者への責任を問う/私的な豊かさの模索

まず、国際社会での法の支配の進展ということがあります。国際刑事裁判所はICCと略すのですが、2003年についに設置されました。これは何がすごいかというと、個人が国家の指導者などを訴えることができるんです。それで、今実際はかなり裁判が進んでいます。つまり、今までの国際社会はやったもの勝ちといえますか、国をとって国の名前でやれば、戦争で負ければ別ですが、処罰されない。それが今やそうではなくなってきたということです。

2001年の国連会議がありまして、そこで奴

隷制や奴隷貿易が人道に対する罪だとされた。どういうことかということ、時効のない罪だということが言われ出しました。それを基にして、奴隷制に対する補償を要求しようなどという議論もすごく出てきています。植民地支配の責任が問われてきている。

さらに2009年、去年に国連総会で先住民族の権利に関する宣言というものが出されました。日本ですとアイヌ民族が先住民族で、沖縄についても若干そういう議論があります。昔取られた土地を、やはりきちんと返していこうという方向が明確に出されています。これはすごいことで、「やったもの勝ち」暴力支配への歯止めになる。正義回復を英語でredressと言いますが、それがかなりいろいろな形で進みつつあります。私は、これは豊かさだと思います。やはり余裕が出てくると、こういうふう過去のことにいろいろ振り返って、なんとかしようという気持ちが出てくるわけです。

次ですが、ここで私的な豊かさというのは、自発的な共同体のネットワークがたくさん出てきていることです。いろいろ書いておきましたが、要するに自発的に集まってコミュニケーション、意志を通じ合う、そういうことを何よりも中心にしている。ボランティアですとか、いろいろな町づくりや有機農業、人権問題、フェアトレード。そういう問題で集まる人がかなり増えて、なんとなくいろいろなつながりがで

きてきている。

私が今日着ているTシャツの「べてるの家」というのは、北海道の浦河べてるの家というところで、統合失調症の方がつくられたTシャツです。3度の飯よりミーティングということで、病気の人が社長になって有限会社をつくっています。本当にミーティングを何度もやっています。本当にミーティングを何度もやっています。われわれもゼミで去年、一昨年と行ってミーティングに出してもらっているいろいろ話を聞きました。本当に面白いんです。これは時間があればまたあとでお話します。

それから、弱さの情報公開ということで、今日は気分が悪いとか、いろいろなことをミーティングではっきりと一人ひとり全員が言っていくということになっている。したがって、安心してさぼれる会社づくり。今日は彼が来ていないけれど、気分が悪いというのが皆わかっていて、ああそうなのか、となってくるわけです。この「べてるの家」に関する本がたくさん出ていまして、それを見ているとあまり書いていないのですが、聞いてみますと、ほぼ全員が生活保護を受けているんです。統合失調症、昔でいう精神分裂病で、絶対治らないと言われて、幻聴や幻覚がなくなる方々なのですが、薬で無理やり消すのではなく、むしろ面白い幻覚や幻聴には毎年幻覚妄想大会というのをやって賞をあげるとか、非常に面白いんです。しかもそういうものをインターネットで公開して、全部実名で本も出ています。写真も出ている。そこへ行くと、本当にそういう人たち

に会えるんです。そこは過疎の町ですが、年間1000人以上の人が訪れて、精神病で町おこしというふうに言っている。

八王子や町田にもその系統の施設や集まりがあります。あちこちにたくさんそういうのができて、そういう形でネットワークがつくられています。私としてはやはり、そういう人と人との関係をととても大切にできるのが、豊かさということだと思えるわけです。最初に見た世界の貧しさというものを、一方での豊かさと一方での貧しさをどういうふうにすればいいのかということで、地球人手当という話が出てくるわけです。

3. 貧しさが解消されなかった理由

その前に、貧しい人をこれまでどうしてきたかという議論がありますが、このへんはざっといくことにします。まず、援助です。政府や国際機関はいろいろな開発援助をしてきました。そのなかでBHN (Basic Human Needs) アプローチというものがあります。早い話が、1960年代に社会主義国の援助を受けて独立した新しい国、キューバやベトナム、アルジェリアなどが社会主義化を目指すというふうになってくるわけです。そうすると、冷戦の最中でもありますし、世界銀行、これはアメリカが中心になってつくった機関と言っているのですが、そこがそれまでの路線を若干修正しまして、貧困世帯、貧しい人に Basic Human Needs、基本的に必要な物資や資金やサービスを提供しよ

うということを言い出すわけですが、70年代に
そういうことを言っていたのですが、結局それ
が今に至っても実現していないのが現実です。

それはどうしてかという、2度のオイルシ
ョック。早い話は国の財政が、日本もそうです
が世界各国とも債務累積でとてもお金を出せ
る状況ではなくなってくる。その一方で、企業
のほうはどんどん多国籍化して多国籍企業に
なっています。そこでどうするかという、
市民社会、ボランティアに期待しよう、あるい
はコミュニティでなんとかやってみようとい
う議論が出てきます。それが次のところでは
国連などもそれにのりまして、国に任せるの
ではなくて小さな国家でやろう、市民社会と多
国籍企業で、何とかしよう。多国籍企業はも
つぱら経済発展を進める。それによって、地球
規模で経済発展すれば自動的に地球規模の貧
しい人も減ってくるのではないかと思ってい
たわけです。

ところが、実際はそうはならない。多国籍
企業一人勝ちの状況下で、企業はどんどん成
長して本当に大きくなりまして、強力になっ
てきます。しかし、市民社会のほうはいろい
ろと抗議運動をやってネットワークをつくる
のですが、全体から見れば周縁的で、あまり
たいしたことない。国連は、小さな国家の
連合体と書いてしまいましたが、ミレニア
ム開発目標というのを
出すんです。2015年まであと5年しか
ないの

ですが、飢餓人口の割合を1990年比で半減
する、あるいは所得1日1ドル未満の人を半
減するというようなことを言っています。それ
ははっきり言って絶望的になっています。先
ほどのグラフを思い出してください。むしろ
飢餓人口も貧困人口も増えているわけです。

そこで、世界銀行と関わった経済学者の人
たちがかかなりいろいろな批判をしているの
が次のあたりですが、このへんは省略いたし
ます。要するに、市民社会や国家がもっと
なんとかがんばってくれという話です。ただ、
少し面白いのは、事実上むしろ直接お金
を配ったほうがいいのではないかというよ
うなことを言っている人も若干出てきてい
ます。Easterly という人などがそうです。

次に、社会主義国のほうはどうなったか
という、ご存知のように1991年にソ連、東
欧が崩壊する。中国、ベトナムは社会主義
を唱えながら資本主義を受け入れて、その
まま貧困も一緒に受け入れてきた。キューバ
の場合は断固として社会主義を唱えていま
して、一応、ラテンアメリカの他の国と
比べると本当に成功しています。ただし、
最初に申しましたように、基本的に職業選
択の自由がないものだから、若い人から見
ると魅力がない。われわれもゼミで2回ほ
どキューバに行きまして、それほど若い人
と話をしたわけではないですが、むしろク
ューバの映画に面白いものいろいろあり
ます。そういうのを見ていると、キューバ
の若い人た

ちは、自由にやりたいけれど、アメリカがずっと経済制裁をしている。アメリカは時々、反キューバ、反体制の人を応援してちょっかいを出しているわけです。

つまり、キューバは未だに革命持続中という感じで、アメリカがいつ攻めてくるかわからない。キューバの人は、俺たちは革命の前は食えなかったと言います。私は、1992年くらいだったか、革命委員会の人の家に勝手に泊ったことがあります。そこのおじいさんと話していると、その人はフィデル・カストロのことをフィデルと呼ぶのですが、フィデルは毎晩3時間テレビに出てきて演説をして、あいつがいなかったら俺たちは家もなかったと言う。本当に狭いアパートですが、そこのおじいさんとおばあさん2人のベッドを私に提供してくれ、その代わりに私は20ドル払いました。その2人は隣のアパートで寝たらしく、そういう金儲けをしている。たぶんキューバの法では違反だと思うのですが、町内で反革命の動きを取り締まるコミテ・レボリュショナルという革命委員の人がそういうことをやっているわけです。

その彼が言うには、革命前から見ると本当に良かった。だけど、本当にフィデルになんとかしてほしいと。私はお酒とコーラを手土産に持って行って、じいさんがキューバリブレをつくり、一緒に飲んだのですが、じいさんは、グラスを傾けながら、今はこれが飲めないと。けどアメリカはいつも狙っているから、やはりフィデルを支持するというんです。そういう貧し

い社会主義国は、結局世界の豊かさにあずかれていない。そういうところでいくら平等を求めてみても、かなり厳しいことになってしまう。そういう話だと思います。

次に、BOPビジネスという議論があります。結局 NGO だとかボランティアでは、らちが明かない。国がやっても、らちが明かない。そうすると、企業にやってもらおうと。ビジネスとして、多国籍企業に、貧しい人に役に立つビジネスをやってもらおうではないかという議論です。それは CSR という企業の社会的責任を果たそうという議論ではなくて、次なる市場として、ピラミッドの底辺にいる40億人の人を目指して、貧しい人が買える、いいもの売りこんでもらおうと。成功例としては、たとえばヤクルトだとか公文式などが出てきます。貧しい人が普通に使えて喜んでもらえるビジネスをもっと多国籍企業にやってもらおうと。

私は、それはそれでいいと思うのですが、結局企業に期待して、その企業がすごい力を持っているからそこで何でも問題を解決していくというほどには、企業の人には自由ではないということをお願いしたいと思います。つまり、個人としてはいい社長さんで、なるべく多くの人を雇いたいと思っても、たくさん雇うと人件費がかさみ、コスト競争で負けるので、そうはいかない。したがって、特に雇用問題は、いくら良心的な人がいてもそこは解決していけない

というのがあります。何かもっと抜本的なことをしなければいけないというわけです。

前置きばかり長くなっていますが、そういうふうにお金もモノもいろいろ余っているのに、なぜそれを分かち合えないのか。ミレニアム開発目標という国連が出している目標というのは、飢餓の人を半減させると言います。でもそれは、半分はいいじゃないかという話です。それはむしろ不道徳といえないか。そこでポッグという哲学的正義論の人がいますが、彼の議論を少し紹介しておきます。

まず、10億人の飢餓人口という広範な人権侵害が存在している、これは事実なのだ。次に、それがこれからも継続していくのは予見可能である。3番目に、しかし現存の資源を用いて、つまりいっぱい余っているのだから、それをきちんと配れば無理なく回避可能である。4番目に、そういう富の再分配制度を導入して飢餓を回避できるということがさらに予見可能である。これは少しまわりくどい議論ですが、こういうことが言えれば、回避しない、わかっていてやらないのは不道徳だろうと、彼は宣言するわけです。私もこの議論には賛成です。では、なぜ不道徳がまかりとおっているか。

まず、教条的な思い込みがあります。たとえば、富の再分配ということは、アメリカの経営学者、先ほどのBOPビジネス論の人たちにはタブーのようになっていて、分かち合うという

発想自体が出てこない。

次に、強いられた無関心。われわれが思考停止、行動停止になるには五つの要因があると言います。まず、飢餓・貧困は大問題で、なくそうとするのは無益な試みだ。これは、実は何にでも言えることですが、大問題でとにかくそれは無理だと。2番目が、何かしようとする危険なのではないか。危険がともなう。3番目に、むしろ何かやると逆効果ではないか。たとえば、富の再分配で貧しい人にお金などをあげると、その人たちが子どもをどんどんつくって、むしろひどくなるのではないか。

ところが実際は、貧困解消と女性の権利が拡大してくると、出生率は劇的に低下するんです。だから、むしろ少子化が問題になるような状況が出てきます。これはノーベル賞をもらったアマルティア・センという人などが言いだしたことで、ほぼ実証されています。貧しいからむしろ人口爆発になっているのですが、普通に考えると……普通にとりか、マルサス主義というのですが、そういう発想がどうしても出てきてしまう。逆効果論です。

4番目に、飢餓・貧困は、世界の指導者たちが解決しつつあり、何もする必要はない。もう待っていればいいという考え方です。最後の議論として、国内問題なのだから、それぞれの国の人でやってもらいましょう。自分たちは関係ないと。ポッグという人は、この5番目が一番手ごわい、これはナショナリズムだと彼は言っ

ています。これは一番手ごわいわけですが、しかし、われわれは見てきたように、今は、グローバル化で、企業も多国籍化し、日本の食料も自給率 40%で 60%は海外から来ているということがあって、とても国内問題というふうには言えないだろうという状況があります。

4. 豊かさを分かち合う

(1)地球人手当てという構想

そこで、豊かさを分かち合う豊かさ、地球人手当てという話が出てくるわけです。フランクマンというカナダの人の、世界的な所得再分配。先ほどのポグは、貧しい人だけにあげようと言うのですが、フランクマンはすべての人にあげる。惑星規模の市民所得と言うことで、すべての人に配れないかと。最終的にはすべての人が生活できるだけのものを配る。第一歩として年間 1000 ドル、だから 10 万円です。一年間で 10 万円なの？ という感じですが（笑）。円にして 1 人 10 万円ですから、2 人だと 20 万円です。5 人家族だと 50 万円です。それを無条件に保障しようという提案をします。

ちなみにこれは、1999 年で見ると、世界平均の 1 人当たり所得は 5000 ドルだと言います。つまり、1 人当たり年間所得 50 万円です。日本はすごく高いところにあります。その 5 分の 1 をとりあえず。それを見ると、結局 1 日当たり 2.74 ドルです。そこで計算して、今は 65 億人くらいになっていますが、1999 年の 60 億人とすれば、毎年 6 兆ドル必要になる。

その 6 兆ドルをどうやって出すか。1993 年の家計調査を見ると、全世界の高所得者上位 10%の 6 億人は、全世界の所得を全部足した 30 兆ドルの 50.8%を占めている。つまり 15 兆 2400 億ドルを、その 10%の人がもらっている。日本のほとんどの人がこの中に入っていると思います。これら高所得者に、平均 39%の世界所得税をかけようと。そうすると、15 兆の 39%で、6 兆ドルがだせるという計算になる。

彼の場合、実は高所得者をさらに三階層に区分して累進課税にして出していますが、どうですか、私たちがたとえば 40%所得税で国連かどこかにバンと出すのは（笑）。ともかく、カナダの彼はそういうことを提案しています。

それから、2000 年にオランダで設立された Global Basic Income Foundation という財団はとてもいいサイトを持っていて、そこでいろいろなことを言っています。地球人手当ての 5 条件ということで、まず基本的 (Basic)。この財団が面白いのは、今まで通り人々が仕事を続けて収入を得ることもできるし、諸種の社会保険や疾病、失業保険なども受け取る。それに加えて、衣食住、飲用水などの基本的なものが保障されるべきだと。それは地域によって違うだろうが、とにかく基本は保障すべきというわけです。ただし、その前段階として全世界同額支給というのをやってみるといいのではと言っています。これが 1 番です。

2番目、無条件。とにかく、労働の義務を条件とせず金持ちにも支給する。金持ちはわざわざ働かない人が多いのですが、その人にもあげる。3番目、個人給付。とにかく一人ひとり。4番目、子どもも含めて支給する。5番目にグローバル。全世界、全人類に配る。これは実際には各国政府が担当しても、あるいは国連で新しい機関をつくってもいいだろうというわけです。

導入計画ですが、最初は1人当たり毎月10ドルから初めて、2015年には中間段階として、1日1人1ドル出そうということも言っています。それによって、全世界の10億人の極貧層、これは最初に見せた飢餓の人とほぼ一致しますが、その人たちを一挙になくせる。

ここは少し面白いのですが、2002年の世界人口は62億人で、毎日1ドルで1年2兆2630億ドル必要だということは、同年の全世界GDPを合計すると31兆9270億ドル、ほぼ32兆の7%に過ぎない。全世界のGDP合計の7%で、社会保障支出が、たとえば北欧などの場合はGDPの25%出しているところもあるので、決して不可能ではないだろうというのです。

その財源論として三つくらいあげてあります。一つは、各国GDPの同じ比率で、各国が自由に調達しながら、国連に出す、あるいは新しい国際機関に出す。2番目に、地球規模の課税をいろいろ考える。3番目に、地球の使用権売買制度をつくる。

(2)利点

利点として、これをやるとどこがいいかという10点をあげています。第1に、すべての人間を飢餓と極度の貧困から解放できる。第2に、環境を破壊して人の命を脅かす経済のグローバル化の問題点だけを解決して、しかしグローバル化の利益はそのままもらうことができるのではないかと。3番目、人間としての連帯の意識が生まれる。皆同じように全世界でまず1ドルもらうことになると、それだけで…というわけです。もちろん与えるときに何かきちんと説明するというのは入っていると思います。そうなってくると、4番です。敵対を和らげ、人類共同で問題解決に当たる意識ができる。さらに5番目、飢えと貧困に起因する暴力的紛争や環境破壊をなくすことができる。こじれる前に、ゆっくり話し合う余裕がもてるからです。6番目もほぼ一緒ですね。生存のために費やされる人々の時間とエネルギーを、世界市民としての社会的・政治的な活動に転換して民主主義を強めることができる。

7番目は、これもまた面白いですね。賃労働への依存をなくすことができる。低賃金、長時間、危険労働を、さらに、ここには載っていませんが児童労働をも含めて一挙になくすことができる。つまり、何が何でも雇われなくても、もらったお金を基に何か自分で始めることができる。もっとお金を借りて、事業を始めることができる。もちろん、雇われて働くにせよ、

嫌なところだとすぐ辞めることができるので自由で公正な労働市場になる。ということで8番目、自分の能力を自由に伸ばすことができる。ミュージシャンやアーティストというような人が基本的に暮らしを保障されて、自由に活動できる。9番目に、消費と生産中心の価値観を転換させ、エコロジカルなボランティア活動などがもっと自由にできるだろうというわけです。10番目に、単純な制度なのでいろいろ検証しながら実行することができる。

次のところは、私なりに社会理論というか、社会学部において学生や院生たちといろいろ勉強してわかってきた、これはかなりの社会革命だという話です。つまり、賃労働者階級が消滅してしまい、資本主義ではなくなってしまうのです。さらに帝国主義的な搾取がなくなって、グローバルに無階級な社会になっていく。さらに公共圏というか、自由にとことん議論できる境遇に皆が置かれるのですから、ちょうどギリシャ時代の市民のような形でとことん議論できる。そうすると、民主主義もいろいろ議論されていますが変わってくる。さらに、このサイトの人は言っていないですが、女性も同等にもらいますから女性の経済的自立が保障されてしまうわけです。ということは、家父長制といいますか男が威張っているということは世界史的な歴史を持っているのですが、それも消滅してしまうだろうというわけです。

(3) 難点

ただし、この Global Basic Income 財団の人は難点として二つあげています。一つは、グローバルな合意形成が困難だろう。もう一つは、給付水準をどうやって決定するかが非常に大変だろうというわけです。この1番目のほうの核心は、要するに今の支配階級、支配民族、世界を支配している人たち、さらに家父長制の恩恵を受けている人たちは、このような変化を望まないだろうと。しかし、逆にいうと、世界の大多数が労働者階級、被抑圧民族、家父長制支配のもとで苦しむ女性です。単純に言うと貧しい人たちは、その人たちがうまく合意形成に向かえば、実現するのではないかと。

(4) 希望

そこで、希望ということで、このサイトは三つあげています。一つは、日本も含めてかなりの先進国でベーシック・インカム議論が進んでいます。ブラジルや南アフリカなどではかなり。それからナミビアでは、あとで言いますが、実験もしています。2番目、アメリカのアラスカ州では、石油の収入を全州民に分けるということをやっています。その結果、アラスカ州はアメリカでは最も貧富の格差が少なくなっています。最後の3番は、結局今までの貧困対策は、ほとんどうまくいっていないので、抜本的にやるにはこれしかないだろうと。

先ほど言いましたナミビアの村で、今年の1月まで2年間実験しました。そこではかなり村

が活性化したとされていて、今年の9月にゼミの学生たちとその村を見に行こうと、今計画を練っているところです。

5. 終わりに

—地球人手当ての実現にむけて

最後に、「19世紀の夢は奴隷制廃止である。20世紀の夢は普通選挙である。21世紀の夢はベーシック・インカムだ。夢を実現してきたのが人類の歴史だ」。これはベーシック・インカムを研究しているヴァン・パリースという人の言葉です。そう見ると、本当に歴史は動くのではないかという気がしてきませんか。さらに、「理屈で批判しても武器にはかなわない。だけど、大衆が理屈を自分のものにすれば武器よりも強いだろう」。これは19世紀のマルクスのことばを私なりに訳しました。人々がどうするかを考えると歴史が動くという話です。

「援助から連帯へ」というのは、かなりいろいろ言われているのですが、実際にどういう形で連帯するかは、僕は地球人手当てのような形が一番いいのではないかと思います。援助交際という言葉がありますが、今の外交はそうなんです。国際会議に出るとそんな歪みを感じます。

最後ですが、東京大学の大学院生の人で、ごみ山のスラムに住みこんだ人がいます。彼が3カ月だったか本当に臭いところに住み込んで、帰るときに友達になったこどもに、俺はもう帰るんだと言いました。そうすると、子どもがこ

う言いました。「え、もう帰っちゃうの？ ぼく知っているんだ。お兄ちゃんは、ぼくたちのことを書いたら、お金がもらえるでしょ」。子どもたちはずっとそのごみ山に住んでいなくてはいけないわけです。それでも、その院生は、さようならと言って帰ってきた。その彼が、僕のところに相談に来たのです。大学院でこれ以上勉強しても本当にこの子たちのためになることをできそうにない、だから自分はせめて自分の食べるものは自分でつくりたい、ものをつくっていきたいと。今もやっていると思いますが、大学院修士を出て飛騨高山に職人になりに行きました。

僕は、大学の学問とはそんなにちやちやなものかと、かなり熱っぽく語ったのですが、そのときの私は、この地球人手当ての議論を知らなかったもので、うまく説得できませんでした。たぶん、ほかの途上国論の研究者も、あの院生の悩みを解決できなかったのでしょうか。僕としては、地球人手当ての議論をもう少し精緻なものにして実現に向けることが、ごみ山の子どもに伝えられる。あるいは、そういう学問にしていくことではないかと思って勉強しているところです。

時間がなくなって質疑応答時間が少なくなってしまいましたが、そのへんにいますので、いろいろ質問などいただければ幸いです。どうもご清聴ありがとうございました（拍手）。